

## 令和2年度 第1回新発田市総合教育会議（会議録）

- 1 開催日時 令和3年2月9日（火）  
開会：午後1時30分 閉会：午後3時00分
- 2 開催場所 豊浦庁舎2階 大会議室
- 3 協議事項  
(1) 新発田市におけるCAPの取組みについて
- 4 出席者  
市長 二階堂 馨  
教育長 工藤 ひとし  
教育委員（教育長職務代理者） 関川 直  
教育委員 桑原 ヒサ子  
教育委員 笠原 恭子  
教育委員 村川 孝子
- 5 会議に出席した事務局職員等  
○市長部局  
みらい創造課長 山口 恵子  
みらい創造課企画政策係長 山田 亮一  
○教育委員会事務局  
教育次長 伊藤 純一  
教育総務課長 平田 和彦  
教育企画課長 橋本 隆志  
学校教育課長 萩野 喜弘  
学校教育課教育センター長 森谷 優子  
教育総務課参事 中山 友美  
教育総務課教育総務係長 杉林 直樹  
学校教育課教育センター主任副参事 廣澤 正文  
○その他  
特定非営利活動法人 子ども・人権ネット CAPにいがた  
事務局長 太田 美津子  
副代表理事 野口 美智子  
笹川 明美
- 6 協議・報告事項の経過  
別紙のとおり

## 1 開会

○山口みらい創造課長

それでは、ただいまより令和2年度第1回新発田市総合教育会議を開会いたします。  
はじめに、二階堂新発田市長よりごあいさつを申し上げます。

## 2 あいさつ

○二階堂市長

何かとご多用の中、また何よりも道足の非常に悪く、お集まりいただきありがとうございます。

平成29年は久しぶりの大雪と言われた年でありました。しかし、今年はその年の除雪費を上回ることとなり、いかに今年の雪が異常であったかということが分かります。市民の皆様には除雪についてままたまならなかった部分もありご迷惑をおかけしました。とりわけ、子ども達は元気に登校していたと聞いておりますが、歩道除雪がなかなか進まず、また歩道のない通学路では雪の壁によって道路幅が狭くなってしまったことから、子ども達には難儀をかけた冬になってしまったと、除雪の責任者として改めてお詫びを申し上げたいと思っております。

こうした中、新発田市でも新型コロナウイルスの感染者が出ておりますが、結果として学校でのクラスターにはならず安堵したところであります。しかし、まだまだ油断はできませんので、子ども達を守るという意味でもしっかりとコロナ対策、感染拡大防止に努めてまいります。

さて、皆様ご存じのとおり、私は議員出身の市長であります。国の政党政治であれ、地方の党派制政治であれ、妥協なしでは政治は前に進みません。私は若い時に先輩議員から「政治は妥協だ。でも納得して妥協しなさい。足して2で割るような妥協はしてはならない」と教えられました。つまり妥協するという事は、自分の意見を相手に譲り、ある意味で我慢をするということです。このように我慢をすることが大事となる場面はありますので、我慢をするということを子どもの時にしっかりと身につけることが大切だと思います。コロナ禍において、移動の自由、行動の自由が制限されているという点では、子ども達に我慢をしてもらっているのかもしれない。しかし、この経験が大人になった時に子ども達の一助になればいいと心から思っております。

本日のテーマはCAPであります。いじめをしない、人が嫌なことはしない、しておしまいなことはしないという我慢、しなければおしまいなことはするという勇気、こうしたことをこどもの時にしっかりと身につけているかいないかで、その子の人生が大きく変わるのではないかと感じております。この我慢と勇気を教えることは基本的には家庭が中心的な役割を担うとは思いますが、教育の現場においても子ども達が身につけることができると考えております。本日の会議の中で、学校におけるCAPの取組がより良いものとなるよう忌憚のないご意見をお聞かせいただき、またご指導いただくようお願い申し上げます。

## 3 協議事項

○事務局（山口みらい創造課長）

ありがとうございました。

申し遅れましたが、本日司会進行を務めますみらい創造課の山口でございます。よろしくお願

いたします。

それではこれより本日の協議事項に入らせていただきます。

本日のテーマは「新発田市におけるCAPの取組について」であります。

会議の前に傍聴者の皆様、マスコミの皆様をお願い申し上げます。本日の会議は公開とさせていただきますが、質疑、意見交換の際には大変申し訳ございませんがご退席にご協力いただきますようお願い申し上げます。

それでは、「新発田市総合教育会議設置要綱第2条」の規定により当会議の議長は市長が務めることとなっておりますので、進行については二階堂市長をお願いいたします。

#### ○二階堂市長

それでは、さっそく協議事項に入ります。

本日のテーマは「新発田市におけるCAPの取組について」であります。

はじめに、「CAPプログラムの概要について」、事務局から簡単に説明をお願いします。

#### ○森谷教育センター長

新発田市教育委員会教育センターの森谷です。よろしくお願いします。

CAPプログラムの概要についてご説明いたします。

学校における課題は様々ありますが、中でもいじめは子どもたちの身近にある重大な人権侵害問題でもあります。そして、好むと好まざるとに関わらず、誰もがそれに関わらざるを得ないのが現状です。しかし、多くのケースで、いじめで苦しんでいる本人が、いじめの被害に遭っていることを伝えられずにいます。また、それを見ている傍観者の意識が低かったり、加害者自身が辛い背景を抱えていたりする場合があります。そこで、新発田市教育委員会では、全ての子どもが尊重される環境づくりを推進するため、CAPプログラムを実施しています。プログラムを通して、自分自身を大切にできる子ども、他人を大切にできる子どもの育成と、子どもを支える大人の支援の在り方について理解することを目指しています。

CAPプログラムでは、子どもワークショップと大人ワークショップの2つを実施しています。子どもワークショップでは小学5年生と中学1年生全員に、大人ワークショップでは学校の全教職員と保護者や地域の方を対象に実施しており、今年度で3年目となりました。

CAPプログラムは子どもへの暴力防止プログラムです。子ども達が、いじめはもちろん、痴漢、誘拐、虐待、性暴力といった様々な暴力から自分を守るための人権教育プログラムです。こども達の発達段階にふさわしい寸劇、歌、人形劇、討論などを通して、子どもを怖がらせることなく、暴力防止の具体的対処法を教えます。従来の「～してはいけません」式の危険防止の方法とは根本的に異なり、「～することができるよ」と行動の選択肢を広げ練習します。そして、CAPプログラムでは人権を「安心・自信・自由」と定義し、子ども達に繰り返し伝え、私の「安心・自信・自由」も、あなたの「安心・自信・自由」も、どちらも大切にされなければならないのだということを確認します。

子どもワークショップでは、暴力とは人の心と体を深く傷つけること全てが暴力であると確認し、どんなものが暴力なのかを全員で共有します。そして、いじめ、誘拐、性暴力、虐待など、暴力という怖いテーマについて、劇などのロールプレイを通して具体的に学ぶことで、こどもが漠然と抱えている不安を減少させます。そして、CAPプログラムは参加型で行われます。ロールプレイを見て、被害者の気持ちを想像し、暴力に遭いそうになったらできることを一人一人が具体的に考えます。出た意見はどの意見も尊重されます。そして、実際に自分たちも劇に参加することで、自分の権利や友達の権利を守る力が自分自身にあることを実感し学んでいきます。CAPでは「イヤだ

と言う」「逃げる」「誰かに相談する」という3つの対処法「NO」「GO」「TELL」を教えています。中学校ではさらに突っ込んだ場面設定を行い、自分達が考えた解決策について発表することで、実際の場面に生かされる確率がぐんと上がります。

保護者と教職員は子どもを支える大人です。大人ワークショップでは、子どもの人権を尊重した支援のあり方について、知識と技術を学びます。

CAPプログラムの概略は以上であります。この後、実際のロールプレイをご覧ください。

#### ○二階堂市長

それでは、今程の説明で、CAPの概要については御理解いただけたと思いますので、次の「CAPワークショップのデモンストレーション」に移ります。

本来は、実際に子ども達が学習している様子を見ていただきたかったのですが、新型コロナウイルス感染症対策のため、現在、学校は関係者以外の立ち入りを制限していることから、職員を相手にデモをお願いしております。

本日は、新発田市のいじめ対策事業をともに取り組んでいただいております、NPO法人CAPにいがたの皆様にお越しいただいております。それでは、CAPにいがたの皆様、よろしくお願いいたします。

#### ○特定非営利活動法人子ども・人権ネットCAPにいがたによるワークショップのデモンストレーション【中学校1年生向け テーマ「いじめ」】

#### ○二階堂市長

ありがとうございました。

私も、CAPの取組みについて承知はしてはしておりましたが、今日、実際に子ども達が学習する具体的な内容を知ることができました。CAPにいがたの皆さんへの質問等は、後程お受けすることとし、次に進めます。

それでは「新発田市における取組状況及び報告書の分析」について、事務局から説明をお願いします。

#### ○森谷教育センター長

CAPプログラムの取組状況と報告書の分析についてご説明いたします。

新発田市では2018年度から3年間、各小中学校において、子どもワークショップと大人ワークショップを行っています。子どもワークショップは市内の小学5年生、中学1年生全員を対象に、大人ワークショップは各校の教職員全員と保護者や地域の方を対象に実施いたしました。また、2019年度は、希望する学校の中学3年生にもワークショップを実施しました。

CAPプログラムの取組による成果についてであります。成果の1つ目は「いじめの認知件数の上昇」であります。認知件数が増えることは、早期対応に繋がります。2013年6月に施行されたいじめ防止対策推進法により、いじめの定義が変わりました。それまでにもいじめの定義は何度か改訂されてはいたしましたが、この2013年の改正で、いじめは「あってはならない」ものから、いじめは「どの子どもでも、どの学校でも起きるもの」だという大きな発想の転換がありました。この背景には、児童生徒を守ることを最優先とし、「いじめは見えにくい」という問題を解決するということがあります。結果、全国でも、新潟県内でも、新潟市でも認知件数が増えました。黄

色の棒グラフは全国の数値です。青のグラフは新潟県、緑のグラフは新潟市の数値でいずれも認知件数が上昇しています。しかしながら、赤色の新発田市の数値は、依然として上がらない状態でした。ところが、2018年にCAPプログラムを開始すると、2019年末時点での認知件数は414件となり大幅に増えました。2020年の認知件数は現時点で2019年の件数を上回っております。文部科学省では、「いじめの認知件数が多いことは教職員の目が行き届いていることの証である」とし、「積極的に認知し、早期対応を行うことが大切である」としています。

成果の2つ目は、被害者、加害者、傍観者の意識の変容です。これは、いじめの被害経験のある小中学生への「いじめられた時、あなたはどうしましたか。どうしますか」という質問に対する回答です。CAPプログラムの受講前の青のグラフと受講後のオレンジのグラフで大きな変化が見られます。「嫌だと言う」「逃げる」「誰かに相談する」の3つの項目で、小学校、中学校ともに大幅に増加しています。逆に「やり返す」「誰にも言わない」が受講後は減少しています。この「嫌だと言う」「逃げる」「誰かに相談する」の3つの行動をとるという回答が増えたことは、いじめへの認識が高まり、好ましい対処への変化が促進されたと言えます。次は、傍観者に分類される小中学生への「もし、いじめを見たらどうしますか」という質問に対する回答です。CAPの受講前と受講後では「いじめられている人に声をかける」「いじめている人に何人かで止めようと言う」「誰かに相談する」という回答が小学校、中学校ともに増加し、「誰にも言わない」「何もしない」という回答が減少しました。更に、いじめの被害経験のある小中学生への「もし、いじめを見たらどうしますか」という質問に対する回答です。先ほどと同様の傾向が見られます。注目すべきは、被害経験のある中学生で「誰にも言わない」という項目が、CAP受講後にはゼロになったことです。これは大きな成果と捉えています。

成果の3つ目は、児童生徒、教職員、保護者の意識が変容したことにより肯定的評価が上昇したことです。CAPのワークショップを受講した後に書いた小学生のふりかえりです。「最初は、いじめから逃げようと思っていた。でも、嫌だと言う勇気が出てきた」「次に何かいじめられたりしたら、言いたいことを言いたい」「チクると相談は違う。他にも新しい考え方が分かって良かった」「困っている友達がいたら、すぐに付き添いたい」「自分は嫌なことでも友達の前だと笑って終わらせてしまうから、今度からきっぱり言う」。続いて中学生のふりかえりです。「今までいじめをされた時、自分はずっと我慢していた。でも、つらいときは我慢せず誰かに頼っていいのだと分かった」「相手の話を傾聴する。小学校5年生のワークショップを思い出した」「やられたらやり返していたので、その考えを改めようと思う」「授業では教えてもらえないこともあり、とてもためになった。役に立つと思う」。続いて教職員のふりかえりです。「メンバーが変わるので、毎年やることは大事だと思う」「何回受けても新たな気づきがある」「いじめをしている加害者も問題を抱えているかもしれない、助けを必要としているかもしれないという視点をもつことは大切だと思った」「何があった？と聴くばかりで気持ちに寄り添うことができていなかった。相手の気持ちを繰り返し言葉にし、褒めて認めていきたい」「性暴力の授業をしていただきありがたかった」「話してくれてありがたうと言えるようになりたい」「子どもたちのSOSは増えてきた。次は、SOSにしっかり対応できる力量を身に付けないと、せっかく相談しても…となってしまう恐れがある」。最後に保護者、地域の方のふりかえりです。「話の聴き方がとても勉強になった」「自分がいつも親目線で話していることに気づいた」「いじめられている子にあなたが悪いのではないと伝えることが大切だと感じた」「子どもへの具体的な言葉のかけ方が分かりました」「子どもの話を聞く際に、口をはさまずに最後まで聴く努力をしようと思った」「地域の子どもを大人みんなで守っていききたいと感じた」。このようにワークショップに参加した子どもからも大人からも、意識の変容による肯定的評価が上昇しています。

次に、CAPプログラムの取組結果に対する第三者の意見をご紹介します。はじめに、新潟大学

教職員大学院の相庭和彦教授からいただいたご意見です。「CAPの受講後、被害者の権利意識の成長、加害者の意識変容、傍観者の意識変容がありました。よって、CAPプログラムはいじめ問題の解決、再発防止に有効であると証明されたと思います。子ども集団を対象に展開し、加害者になることを防止する効果を発揮しています」。お二人目は、精神科専門医で日本自殺予防学会の会員である渡邊良弘先生からいただいたご意見です。「CAPプログラムは、一人ではなく仲間をつくり、いじめ解消に働きかける体験をします。それにより、勇気が実感となり、被害者の行動意識の向上、加害者の抑止志向、傍観者の介入意思に繋がります。これは、教室の雰囲気を含み、子どもにうまく働きかけるスタッフの継続的活動によるものと言えます」。このように、有識者である第三者からも、取組結果について評価をいただいております。

一方で、今後の課題についてであります。課題の一つ目は、子どもの話をよく聴き、認知した一つ一つの事案へ丁寧な対応をするということです。こどもからのSOSは増えてきていますが、こどもが「せつかく相談しても…」ということにならないよう、教職員がしっかり対応できる力量が必要です。このためにも、毎年継続して研修することがスキルアップに繋がります。また、教職員が互いに支え合い、高め合っていく協働的な関係を構築することが、子どもの話をよく聴くこと、事案へ丁寧な対応をすることへ繋がっていきます。

課題の二つ目は、こどもの問題解決力を促進するため、各校がCAPプログラムで学んだことを継続して活用していくことです。CAPワークショップの授業の時だけでなく、各校で、日々の学級活動や道徳などに取り入れて活用していくことが大切です。声かけや傾聴を続け、各校の環境を整えていくことで、こどもの問題解決力は促進されます。

課題の三つ目は、保護者、地域の方のワークショップの参加者を増やすことです。これは、子どもを支える大人を増やすためです。教職員は毎年全員が研修を受けていますが、保護者の参加は全体の1割弱です。保護者の当事者意識を高めるためにも、PTA行事に組み入れたり、地域の方へもご案内したりするなどの工夫が必要です。そして、CAPプログラムの受講後は、親子で様々なことについて話し合ってもらいたいと考えています。CAPプログラムの受講が家庭での対話のきっかけとなり、家庭教育力の向上に繋げることも重要な役割と考えています。

以上のように、3年間の取組で成果と課題が明確になりました。次のステップのために、成果と課題を学校と共有し、より連携を強め、課題を解決し、CAPの取組がより効果的なものとなるよう進めてまいりたいと考えています。

#### ○二階堂市長

ただいま、事務局から説明がありました。

冒頭の挨拶でも申し上げましたが、新発田市ではどの子どもにも辛い思いは絶対にさせないという強い気持ちからいじめ対策に力を入れて取組んでおります。具体的な手法について、この総合教育会議の場でも話し合ってもらいました。その中で、本日のテーマとなっております「CAPプログラム」に取組むこととし、平成30年度から実施してもらいました。これについての現状と、この度まとめられた報告書について説明がありました。

それでは、この後、質疑に移ります。

#### ○山口みらい創造課長

それでは、ここで傍聴者及びマスコミの皆様には退席をお願いいたします。

#### ○二階堂市長

先程のデモンストレーション及び事務局からの報告について、ご質問はありますでしょうかまた、

CAPにいがたの皆様へのご質問もここでお受けします。いかがでしょうか。

○二階堂市長

先ほど、森谷センター長からCAPプログラムを行った前と後では、いじめの認知件数が増えたと報告がありましたが、これは隠れていたものが見えるようになったと理解して良いのですか。

○森谷教育センター長

いじめの捉え方が変化したということでもあります。これはいじめだということを皆が認識し、認知できるようになったということでもあります。

○二階堂市長

村川委員、どうぞ。

○村川委員

私は中学校向けのワークショップを初めて見ましたのでとても良い機会となりました。ありがとうございました。私がCAPを初めて見たのは20数年前であり、あれからプログラムもバージョンアップしてきたことと思います。今回、子ども達の様々な声を知ることができました。子ども達の様子というのは、20年前と変わっているのでしょうか。道徳の授業が変わってきているのですが、CAPにいがたの皆さんはワークショップを通じてどのように感じていますでしょうか。

○二階堂市長

CAPにいがたの太田事務局長、お願いします。

○CAPにいがた 太田事務局長

私達は、子ども自体は変わっていないと考えています。20年前と比較しSNSが普及するなど、子ども達を取り巻く環境は大きく変化していますが、こども一人一人と対応している時は、やはり子どもというのは素直だなと感じています。プログラムとしては小学生と中学生で内容が異なります。中学生は思春期の特徴に合わせていますので、いじめのテーマでも傍観者はどうして傍観するのか、傍観者にできることは何があるのかということ、発達年齢に合わせて中学生のプログラムに組み込まれています。小学生は、いじめられている自分にできることということかというプログラムが中心になります。

○二階堂市長

桑原委員、どうぞ。

○桑原委員

子どもワークショップは、小学5年生と中学1年生全員を対象に3年間実施してきたということですが、2019年度は希望する学校の中学3年生も実施したということでした。実際にどれくらいの中学校が希望したのでしょうか。小学校5年生と中学校1年生の差は大きくないと思うのですが、中学3年生になると、中学1年生よりも思春期としての特徴が出てきていると思います。本日のデモンストレーションを非常に興味深く拝見しましたが、これを中学3年生に対して行う際のポイントなどがあれば教えてください。

### ○CAPにいがた 太田事務局長

中学校3年生でも、いじめがテーマの際は先ほどご覧いただいたデモンストレーションと同じものであります。1年生と3年生の違いがあるのは性暴力についてです。近い知っている人からの性暴力として、1年生は親戚のおじさんからキスをされるというものですが、3年生は思春期ということで彼氏彼女、恋人同士で起こる性暴力、デートレイプについて取り上げます。この部分だけが変わります。2019年度にはこのプログラムも含めて、3中学校の3年生8クラスに実施しました。もう1校希望があったのですが、残念ながら日程等の調整がつかず3校の実施となりました。

### ○二階堂市長

それでは、意見交換に移ります。

デモンストレーション及び事務局からの報告を踏まえ、CAPの取り組み、いじめ防止対策について、教育長及び教育委員の皆様と意見交換を行いたいと思います。

はじめに、工藤教育長からお願いします。

### ○工藤教育長

CAPプログラムは今年で3年目です。このアンケート結果は2年実施をした時点での結果であり、今年度は初年度に小学5年生でCAPプログラムを受講した子ども達が中学1年生となって、改めて受講することになります。これは一度受講しているからもういいというのではなく、再度受講することで、子ども達自身、また感じる事が違ってきますので、中学校ではその成果に期待しています。このCAPの取組は、単に暴力から自分の身を守るハウツーではなく、人権、つまりあなたは大切な存在だということを教職員が子ども達に語るということが重要であります。一人一人を大事にして、一人一人の意見を聴く、これは学級活動や道徳活動でも行っておりますが、行うのは学級担任です。日々授業を行っている学級担任が行う場合よりも、外部からきちんと研修をうけたプロの方に来ていただき、丁寧にプログラムを行ってもらおうと、子ども達はまた違う感じ方をし、積極的に取り組むようになります。また、私が学校現場にいた時にCAPプログラムに取り組んだことがあります。CAPの研修会を行うと子どもはもちろん変わりますが、教職員も大きく変わります。なぜかという、教職員の研修はほとんどが自己研修です。こうした人権にかかる研修は本当に機会が少なく教職員自身に任せきりという面があります。しかし、CAPを導入することにより、新発田市が取り組んでいる人権教育、同和教育と合わせ、若い教職員にとっても力が付きます。若い教職員が子ども達と向き合い、一人一人を大事にするという教育の基本を学んでいきます。そうすると、教職員が学級経営にこれを活かして学級経営もうまくいくようになります。新発田市が取り組んでいるCAPプログラムは、実は職員研修にも結び付いています。

先ほど二階堂市長から認知件数の増加についてご質問がありましたが、いじめをなくすことは困難で、いじめは隠れていることがほとんどです。しかし、CAPに取り組むことで、自分がだめだから、自分が悪いやつだからという自己肯定感が低い子、また、あの子はいじめられても仕方ないと考えていた子が、そうではなく、だめだよ、あれはいじめだよと教職員に教えてくれる、進言する、アンケートに書くようになります。そうすると認知件数が増えてきます。子どもから声が上がれば、教職員はCAPプログラムで研修していますので、いじめた子にも、いじめられた子にも、傍観者にも全て人権があるという基本に基づき一人一人から丁寧に話を聞くようになります。これにより早期発見、早期対応が可能となり、いじめが長期化したり、複雑化する前に解決につながるようになります。先ほどの森谷教育センター長の報告で課題として挙げられていましたが、教職員はCAPのワークショップの時だけでなく、CAPプログラムで学んだことを継続して日々の学級活動に活用し、声かけや傾聴を続け、より力をつけていくことが重要だと考えています。このよう



に、私はCAPの取組は、いじめを含む多くの場面で効果をあげるものと感じています。

○二階堂市長

ありがとうございました。関川教育長職務代理人、お願いします。

○関川教育長職務代理人

CAPが入ってきた頃、私も現場におりました。当時はまだ半信半疑という状況でありました。しかし、今日のように実際の取組を見ますと、その都度、新鮮な感覚になります。現場では、子ども達に自己肯定感を持たせたい、自己有用感を感じさせたい、自己実現を目指す心を育てたいと言っておりますが、言葉だけになってはいないかといつも危惧しております。先ほど教育長もおっしゃったように、CAPの取組、研修を通して、教職員が成長する、このことが子どもを見る変化に繋がると思っております。そうすると、いじめている事象なのか、単なるじゃれあいののかを見極める力量がついてくると思います。ある事案を見たときに、これはいじめだと判断する感覚が鋭く磨かれることとなりますから、発見が増えるのは当然のことと思います。これは悪いことではありません。だからこそ、発見した後の対応力をより身につけていければ、さらに前進できるという思いを、現場の教職員と教育委員会で共有していきたいと思っております。

○二階堂市長

ありがとうございました。桑原委員お願いします。

○桑原教育委員

ロールプレイを興味深く拝見しました。いじめというのは、おそらく極めてストレートな感情が行為に繋がっていると思います。そうした非常に感情的なレベルで起こっている行為を、ロールプレイを行うことで客観視できると思います。これはお芝居、演劇でも言えます。良いお芝居は人間の生き様が象徴的に描かれているので、日頃は埋没しているものが、舞台上に示されると観る側はメッセージとして受け取ることとなります。CAPのロールプレイはこれと同じ効果が起こる、つまり、日常で起こっている出来事を客観視でき、自分がロールプレイの中のいじめられている人なのか、いじめている人なのか、また自分は傍観者なのだと認識をする非常に貴重な機会だと思いました。特に年齢が低ければ低いほど、素直に学習することができると思います。こうした体験は、成長する中で、小学校の時に学習したことが、心のどこか頭の隅に残っていて、立ち止まって考えるきっかけになると思います。

また、最近メディアでも人権と言われる場面が多いのですが、では人権とは何かと問われた時に簡単な言葉で説明できるかどうかという難しいことでもあります。そこを、安心して、自信をもって、自分の思っていることを自由に行動に移せることが人権であると、言葉を置き換えて、人権とはどういうことなのかが良く分かる説明で素晴らしいと思いました。いじめられていると、毎日学校に行く不安感があり、自信を失わなかったとしても自信を表すことができず、複数の人に囲まれるとなれば不自由感があります。この3つの要素がいかに重要であるか、大切にしなければならないことだと学んでほしいと思いました。

また、先生方も学習し、学ぶことが多かったという報告がありましたが、メディアでは相談したけれども教員が受け止められなかったという事案が大きな事件となって報道されています。今後は、相談に来た児童生徒の話を無駄にしないようにするにはどうしていくのかということが、本当に大切になると思います。それと、これは教育委員会でも議論はされていますが、教職員が児童生徒と向き合う時間を確保できる職場環境となることの双方が、教員にとっては必要になると感じました。

最後に、保護者の方が10%程度の参加というのは低いと思います。家庭においても取り組みを行ってもらうためにも、今後、さらに工夫と努力をする必要があると思います。

○二階堂市長

ありがとうございました。笠原委員、お願いします。

○笠原教育委員

私自身、保護者のワークショップに就学前の保育園の時と、小学校、中学校と子どもを通じて参加しています。就学前に受けた時は、そういう考え方があるのかと衝撃を受けたことを覚えています。小学校、中学校でのワークショップも興味深く参加しましたので、新発田市がCAPに取り組んでいることはとても良いことだと感じています。こども自身は、就学前に学習した安心、自身、自由という言葉は自体は覚えていなかったのですが、小学校で受講する時に、ああ、このポーズねと身体の動きは覚えていましたので、このプログラムが子ども達の中で何らかの記憶に残っていると感じ嬉しく思いました。

また、保護者ワークショップでは子どもに戻って受講するのですが、参加した保護者同士で「こどもの時は私達もこう考えていたよね」と自分が子どもの頃の気持ちを思い出しながら受講しました。親となった今は「こうなさい」と言いがちですが、子どもはこう考えているから、こういう言い方がいいよねと話し合ったり、叱るにしても一度間をおいて、分かってもらえるようにどう話すかを考えたり、とても有意義な時間でした。参加した保護者は、参加しなかった保護者に「参加しなかったのは残念だったね、参加したほうが良かったよ」とよく話しています。保護者の参加が1割弱ということなので、こうした保護者間の口コミがこれから広がっていけば参加者が増えるのではないかと思います。私自身、就学前の受講がとても有意義でしたので、可能であれば、就学前の子ども達と保護者も受講できれば、小学校入学後の義務教育の活動がスムーズになるのではないかと感じています。保護者の参加人数が今後の課題ということですので、私も引き続き保護者の皆さんに参加を促していきたいと思います。

○二階堂市長

ありがとうございました。村川委員、お願いします。

○村川教育委員

認知件数が伸びているということに注目しております。新潟市は千人あたり259人、新発田市は57人ですが、県の平均の倍くらいあるのではないかと思います。これは、CAPの取組が、いじめとはどういうものかという定義を具体化できたのではないかと捉えています。千人あたり57人ということですが、私はまだまだあるのではないかと感じています。教職員の中にまだ落ちていない部分があるのではないかと、学校による格差があるのではないかと感じています。その辺をしっかりと対応していかなければならないと思います。

では、これから何をしていくのかということになりますが、それぞれの学校が取り組んでいることを詳しく見ていくことが必要だと思いますし、先生方の意識を繋げていくことも必要だと思います。認知件数の多い新潟市はアンケートをもとに、とても細かく対応しているようです。先ほどの報告の中で今後の課題とされていた「認知後の丁寧な対応」は市内のどの学校も行っていると思います。組織としてよい取り組みをしている学校は、月1回のアンケートをし、その結果について子どもと一対一で向き合い、しっかりと対応し、解決へと繋げています。そのために大変有効であるのが、新発田市が配置している介助員、支援員、そしてSSW、加えて県の生徒指導加配、これ

が現場の先生方にとって大変力強い存在であります。これは、いじめ対策という面からも、引き続き継続していただきたいと思います。

○二階堂市長

この際でありますので、他にも何かございましたらご意見をお願いします。  
桑原委員、どうぞ。

○桑原委員

いじめることは悪いことですので、いじめられる児童生徒を助けなければなりません。その一方で、いじめる側にもそういう行動に出してしまう要因があると思います。家庭の中、学校の中、友達との関係など様々な要因が考えられます。いじめをしないことと同時に、児童生徒の悩み、抱えているものも救い上げて対応していく必要があります。学校で対応するのか、または学外の支援先に繋ぐ、専門家に頼るなどの方法があると思いますが、いじめてしまった子に「いじめはだめだよ」と言うだけでは、最終的な解決にはなりません。この点をフォローする必要もあると思います。

○二階堂市長

先ほどの報告の中で、子ども達からはCAPに対し非常に良かった、ためになったという意見が多くありましたし、教職員からも評価は高いようであります。もう一つの柱である保護者の参加がまだ低い点が課題であろうと思います。基本的には、子ども達の人としての成長は家庭で育つという側面が大きいので、そういう面では、保護者の皆さんにCAPに参加いただくことがとても大事だと思うのですが、教育委員会としては参加者が少ない要因をどう分析しているのか。ただ、参加を投げかけているだけで工夫が足りないということではないのか。

○森谷教育センター長

教育委員会として、保護者の参加を促す努力が不足していた面はございます。各学校でも努力はしていただいております、学校によっては1年生のPTA行事はCAPとし、1年生の保護者全員が参加する学校もあります。一方で、自由参加としている学校では参加者が少ない学校があるのも事実であります。ここが今後の大きな課題であると考えております。

○二階堂市長

学校における様々な取組をどのように進めるかは学校長の判断と責任と聞いていますが、学校長によって、努力している校長とそうではない校長がいるということなのか。

○萩野学校教育課長

29名のどの学校長もCAPプロジェクトの重要性を十分理解したうえで、それぞれ取り組んでおります。学校は、保護者のほとんどが仕事をしておりますことから、実施日を日中にしたり、夜にしたりと保護者が参加しやすい日程を模索しているという点もあります。日中に実施し参加者が少なかったため、次は夜の時間帯に実施したけれども参加者が増えなかったという報告も受けており、保護者を集めるということは悩ましいところでもあります。引き続き、参加者が多い学校の工夫を共有しながら改善していきたいと思っております。

○二階堂市長

先ほどのCAPのデモンストレーションにもあったとおりの諦めないということが大切だ。状況だ

けが先に出てしまうと、同じことの繰り返しになってしまう。

○森谷教育センター長

学校と保護者、地域の関係性が良いと参加率も高くなると感じております。参加しやすい環境づくりと、学校と地域の関係性の両面から改善に取り組んでまいります。

○二階堂市長

私としましても、できるだけことはしていきたいと思っております。こうしたほうがいい、この予算をつけるといいと投げかけをしていただければと思います。

また、政治も耳を傾けることから始まります。本当に耳を傾けなければならないところはどこなのか、真の声、声なき声を聴き受け止めることが大切であります。デモンストレーションを拝見しながら政治もCAPと共通する部分があると感じておりました。

本日はCAPにいがたの皆様にご協力いただき、大変ありがとうございました。引き続き、子ども達へ御指導いただきますようお願い申し上げます。本日は、委員の皆様から活発なご意見をいただき、ありがとうございました。

それでは、「(3) その他」に移ります。皆様から何かございますか。

CAPにいがたの太田事務局長、どうぞ。

○CAPにいがた 太田事務局長

私から一言お話しさせてください。CAPはすべての都道府県に事務局があります。その中で市をあげて、すべての小学校、中学校で毎年取り組んでいるのは新発田市だけあります。私達CAPにいがたとしては、この新発田市で数年にわたり取り組んでいる活動と成果について、新発田モデルとしてCAPの総会でも発表させていただいております。これもひとえに新発田市の皆様のご協力のおかげであります。CAPのメンバーを代表しましてこの場でお礼申し上げます。

○二階堂市長

ありがとうございました。

それでは、以上で協議を終了し進行を事務局へお返しします。

## 4 閉会

○山口みらい創造課長

大変ありがとうございました。特にNPO法人子ども・人権ネットCAPにいがたの皆様にはわざわざお越しいただき、ご協力を賜り心から感謝申し上げます。

本日は大変活発な意見交換を行うことができました。

それでは、以上をもちまして、令和2年度新発田市総合教育会議を閉会いたします。